

## 原山遺跡

——学校法人玉手山学園プール建設に伴う——

1989年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

柏原市は大和川と石川に代表されるため、近鉄大阪線に沿って流れる原川は、意外に知られていないようです。原川は現在でこそ流量の少ない河川ですが、過去にはかなりの流量であったことが、周辺の地質から確認できます。この原川によって、玉手山丘陵が生駒・金剛山地から分断されているのであり、古代においては重要な河川であったと思われます。

原山遺跡は原川の左岸に位置し、浅い谷を挟んで玉手山遺跡に接しています。玉手山遺跡との間には国分から駒ヶ谷への古道が通っています。その古道に沿って飛鳥時代創建の原山廃寺と五十村廃寺が位置します。原山遺跡は、古代の交通の要地に立地した遺跡であったわけです。原山遺跡の住人は、原山廃寺を建立するなど、かなり有力な氏族であったと思われますが、その氏族名は特定できていません。また、遺跡の規模等も未確認であり、不明な点が数多く残されています。

しかし、これまでの調査によって、徐々にではありますが、原山遺跡の歴史像が明らかになりつつあります。昨今のマスコミで話題になるような華やかな調査だけでなく、このような地道な調査の積み重ねが大きな成果となって現われてくることを御理解いただきたいと思います。

平成元年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和63年度に原凶者負担事業として実施した学校法人・玉手山学園（理事長・江端文行）のプール建設に伴う緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、昭和63年7月25日から8月17日まで、および平成元年2月6日から3月10日までの2期にわたって実施した。
3. 発掘調査に要した費用は、すべて学校法人・玉手山学園の負担によるものである。
4. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した。
5. 本書の編集・執筆・製図・写真は安村が担当した。
6. 本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。
7. 調査・整理の参加者は下記の通りである。

竹下 賢 奥川滋敏 北野 重 桑野一幸 寺川 欽 青木久美子  
伊藤芳匡 乾 優世 上田貴司 近藤孝雄 田中國雄 寺尾正美  
本多恵治 前田耕司 南ゆう子 津田美智子 尾野知永子 松井美保子  
乃一敏恵 横関勢津子 吉居豊子

株式会社島田組

## 目　　次

第1章 位置と環境.....	1
第2章 調査の概要.....	2
第3章 調査成果.....	7

# 第1章 位置と環境

原山遺跡は、原川の左岸、羽曳野市營田山から北へのびる舌状台地の先端に位置する。東には原川を挟んで田辺遺跡が、西には小河川を挟んで玉手山遺跡が存在する。遺跡の北側は原川の氾濫原となり、南側は羽曳野市と接する。台地の先端には飛鳥時代創建の原山廃寺が存在し、その南側に集落が広がっていると考えられる。

これまでの調査では、原山廃寺に伴う遺構は確認されていないが、屋瓦は多数出土している。原山遺跡では、1983年度に実施した玉手山学園校舎新築工事に伴う調査が唯一といえる。その調査では、古墳時代の竪穴住居6軒と溝1条、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物6棟・井戸1基・土塁1基・溝1条・炉跡1箇所等が検出されている。ただし、古墳時代の遺構と飛鳥時代の遺構の間には、少なくとも數十年の断絶が認められ、その関連は問題が残る。飛鳥時代の遺構は原山廃寺創建の7世紀中葉頃以降のものであり、原山廃寺に伴う集落であったと考えられる。今回の調査によって、集落が更に広がっていることが確認された。

## 参考文献

柏原市教育委員会『柏原市所在遺跡発掘調査概報—原山・田辺・大槻遺跡—1984年度』1985

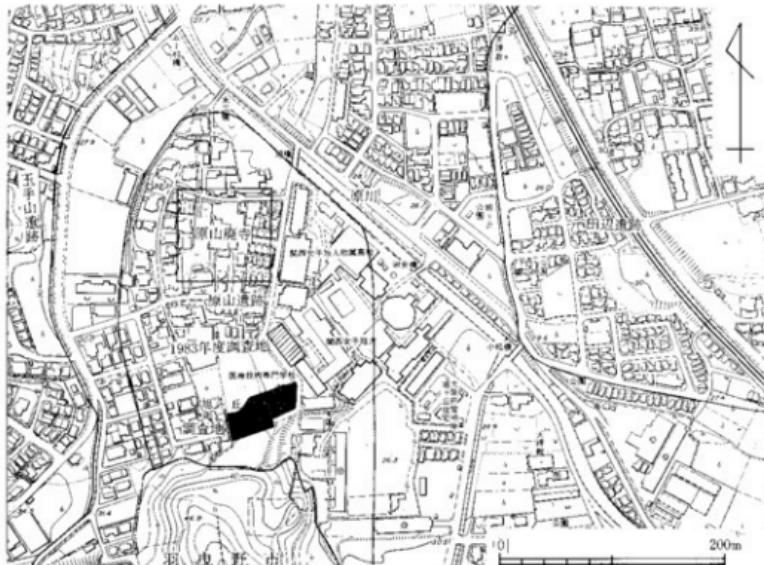


図-1 調査地位位置図

## 第2章 調査の概要

今回の調査は、学校法人玉手山学園のプール建設に伴う調査である。玉手山学園では、昭和63年度以降の事業として、プールと本館の新築工事の計画があり、その計画に基づいて、柏原市教育委員会社会教育課が昭和63年5月に予定地の試掘調査を実施した。その結果、本館予定地（現プール）では、遺構・遺物は確認されなかったが、プール予定地では、遺構・遺物が検出され、発掘調査を実施することになった。調査は昭和63年7月25日に着手し、8月17日に終了した。ところが、調査終了後、玉手山学園よりプールの位置を西側へ変更したいとの届け出があり、再度、予定地を調査することになり、平成元年2月6日から3月10日まで実施した。本報告では昭和63年の調査区をI区、平成元年の調査区をII区として扱う。調査面積はI区が約420m<sup>2</sup>、II区が約600m<sup>2</sup>である。

今回の調査区は1983年度の調査区の南50mに位置し、原山廃寺からは約100mの距離に位置する。今回の調査では、古墳時代の遺構は検出されず、大半が飛鳥・奈良時代の遺構であり、飛鳥・奈良時代の原山遺跡の状況が徐々に明らかになってきた。

プールの位置変更によって、I区の遺構は保存されるが、II区の遺構の大半は保存が不可能となった。敷地の有効利用という制約があり、他に適当な用地もないため、やむを得ないと判断した。



図-2 調査区位置図

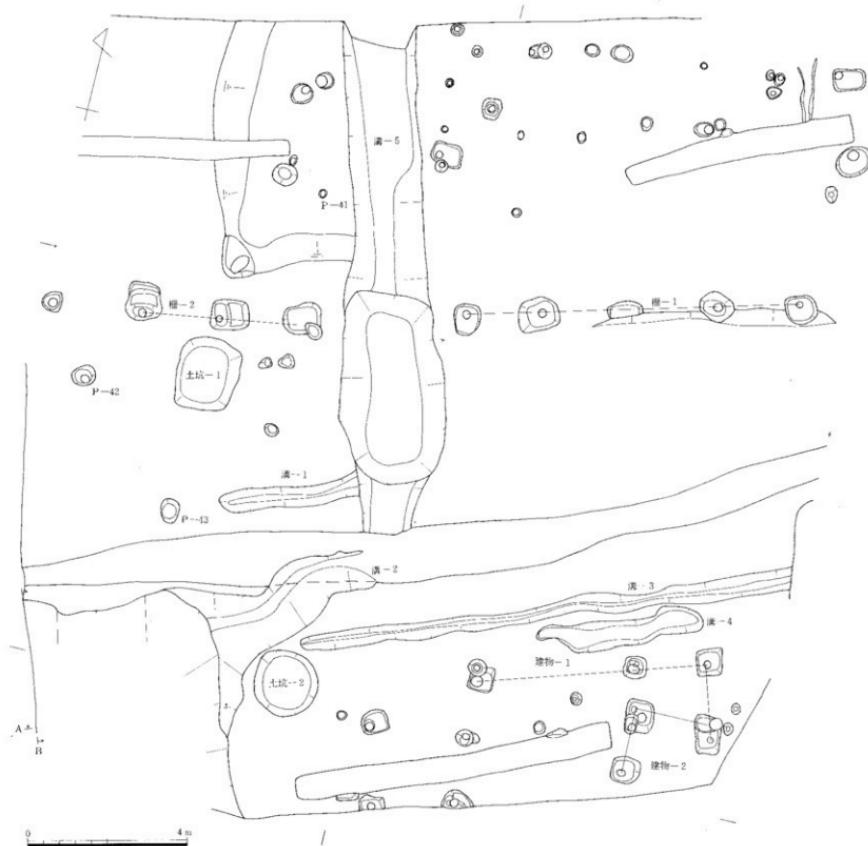


図-3 I区遺構全体図



図-4 II区造構全体図

## 第3章 調査成果

### 1. 層序

表上、および褐色土を除去すると、褐色～灰色砂質土の遺物包含層に至るが、Ⅰ区西半、Ⅱ区西半では遺物包含層はみられず、直接地山に至る。これは、調査地が西に高く、東に低い緩斜面に立地しており、高い部分が削平を受けているためである。なお、現況ではⅡ区がⅠ区より約2m高い。

Ⅰ区では、調査区南西の落ち込み部分で土層図を作製した。土層は粘土と砂が互層をなしており、滯水があり、徐々に埋まったことを示している。この落ち込みから東へ溝一2が続いており、溝一2の延長上、調査区東半で灰褐色上の遺物包含層が認められたが、遺物包含層の厚さは30cm以下であり、7～8世紀の遺物を含んでいる。

Ⅱ区では、調査区北東部で溝状に遺物包含層が堆積している部分があり、最も包含層の厚い部分で土層図を作製した。土層は上層に砂質土層、下層に砂層がみられる。遺物は第1層・褐色砂質土と第7層・灰色砂質土から、その大半が出土しており、下層からの出土量は少ない。遺物はⅠ区と同様に7～8世紀代のものである。また、第10層・褐色砂礫上、および第11層・灰褐色砂礫土の上面からサスカイトの原石、剣片が多数出土している。土器は全く出土していないが、石鎧や石匙の出土から、縄文時代晩期から弥生時代前期頃の石器製作遺跡が存在していたものと考えられる。

造構は大部分が地山面で検出されているが、Ⅱ区では、第1層・褐色砂質土の上面で若干の造構が検出されている。



図-5 Ⅰ区土層図



図-6 Ⅱ区土層図

## 2. 造構

造構はピット165、土坑6、溝11などが検出され、ピットから復元される掘立柱建物が7棟、柵が2列である。大部分は7～8世紀の造構であるが、ピット-43などのピットの一部と、土坑-1・2は中世、土坑-6は近世の造構である。以下、掘立柱建物、柵、土坑の順に、その概要を記述する。

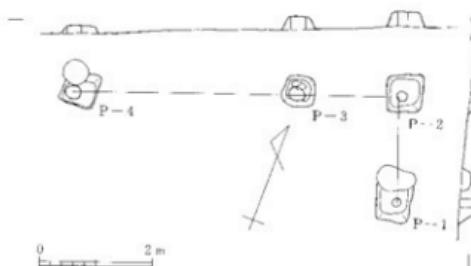


図-7 建物-1 (レベル高34.5m)

### 建物-1

建物-1・2は、どちらもⅠ区南東部で検出されている。建物-1は1間以上×3間以上、188cm以上×572cm以上である。ピット-3とピット-4の間のピットは消失している。ピットは方形平面を呈し、一辺60cm前後の大きさである。ピット-3から、7世紀中葉の須恵器杯身片が出土。

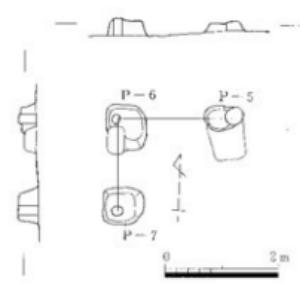


図-8 建物-2 (レベル高34.5m)

### 建物-2

1間以上×1間以上、168cm以上×208cm以上の規模の建物である。ピット-6・7は方形平面を呈し、一辺70cm前後を測るが、ピット-5は不整円形平面を呈し、やや小さい。柱の直径は15cm前後であろう。調査地外へ続いている。規模は不明。時期を確認できる遺物は出土していない。主軸はN-1°-W。

### 建物-3

建物-3～7はⅡ区で検出された建物である。建物-3は1間以上×1間以上、208cm以上×238cm以上の規模の建物である。ピットは方形平面を呈し、一辺70～100cmを測る。ピットの残存状態は悪く、深さ20cm前後を残すにすぎない。かなり削平されており、南側のピットは消失している。また、北西部は調査範囲外へ続いている。柱の直径は20cm前後と推定される。主軸は、N-2°-W。ピット内からは、少量の土師器・須恵器が出土しているが、時期を確認できる遺物は見られない。

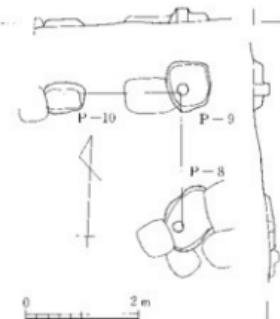


図-9 建物-3 (レベル高36.0m)

#### 建物-4

1間以上×3間以上の規模は196cm以上×609cm以上の建物である。ピットは隅丸方形平面を呈し、一辺70cm前後の大きさである。柱の直径は20cm前後、深さは30cm前後を残す。主軸はN-12.5°-W。時期は不明である。

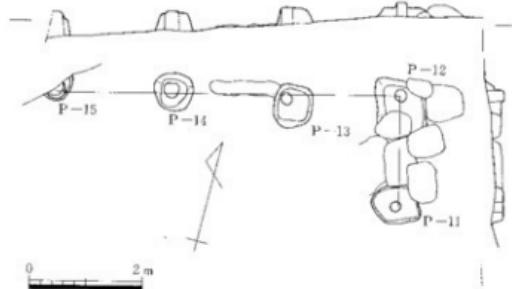


図-10 建物-4 (レベル高36.0m)

#### 建物-5

2間以上×4間以上の建物であり、308cm以上×652cm以上の規模である。ピットは一辺70cm前後の方形平面を呈し、深さは20cm前後を測る。柱の直径は15cm前後。ピット-19～22は、柱位置のみ更に掘り下げられている。主軸はN-12°-Wである。時期は確認できない。

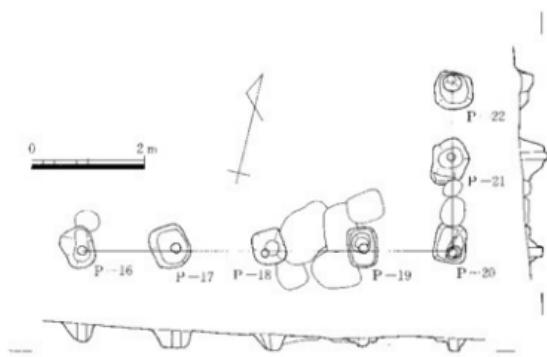


図-11 建物-5 (レベル高35.5m)

#### 建物-6

土坑-3の東側で検出された2間×1間以上の建物であり、400cm×248cm以上の規模を測る。ピットの平面形は一定せず、大きさも30～70cmと一定しない。建物-6の周辺は、かなりの削平を受けており、ピットは10cm以下の深さを残すにすぎない。そのため、北側のピットは不明である。ピット-23から柱の直径は20cm前後と推定されるが、他のピットでは確認できなかった。主軸は磁北に一致する。建物の時期は、やはり不明である。

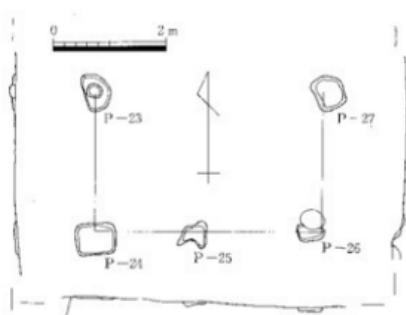


図-12 建物-6 (レベル高36.0m)

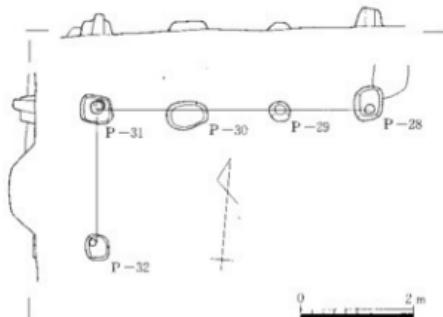


図-13 建物-7 (レベル高37.0m)

#### 建物-7

1間以上×3間以上の建物であり、236cm以上×480cm以上の規模を有する。ピットは円形、もしくは方形平面を呈し、40~70cmの大きさを測る。柱の直径は15cm前後。主軸はN-5°-W。ピット-31の掘方内から、須恵器杯身片(図19-2)が出土しており、7世紀後葉頃の時期と考えられる。

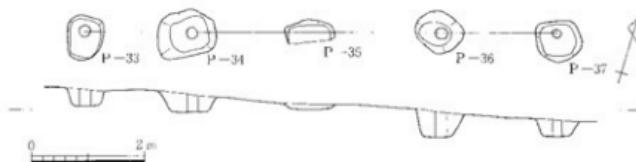


図-14 柵-1 (レベル高34.0m)

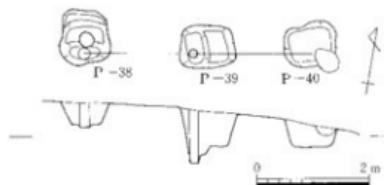


図-15 柵-2 (レベル高34.5m)

#### 柵-1

ピット5個からなる柵であるが、南側がかなり削平されているため、南へ続く建物であった可能性も考えられる。長さは832cmを測る。ピットは方形平面を呈し、一辺80cm前後を測る。軸はN-79°-E。時期を確認できる遺物は出土していない。

#### 柵-2

3個のピットによる柵であり、やはり建物の一部である可能性も考えられる。長さは約400cm。ピットは方形平面を呈し、一辺80~100cmを測る。柱の直径は15~20cm、ピット-40の柱は南東側へ抜き取られている。ピット-38・39は二段掘りであり、ピット-39は深さ100cmを残す。軸はN-81°-E。時期を確認できる遺物は出土していない。

柵-1・2の間に溝-5が存在するため、その間の状況は不明であるが、軸が2°しか異ならないことから、その間に1個のピットを介した一列の柵になる可能性も考えられる。柵-1・2共に時期を確認できる遺物が出土しておらず、同時期か否かは不明である。また、軸の一致する建物も認められない。

### 土坑-1

160cm×184cmの隅丸方形を呈する土坑である。深さは約90cm。第1・2層から瓦器碗・瓦質の羽釜（98-102）、第3層から瓦質の羽釜（103）が出土しており、13世紀後半と考えられる。

### 土坑-2

直径約160cmの円形平面を呈する土坑である。深さは約60cm。埋土内から屋瓦片が出土しているが、時期は不明。



図-16 土坑-1

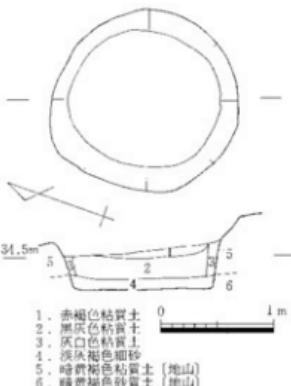


図-17 土坑-2

### 土坑-3

直徑約260cm、深さ280cmを測る土坑。埋土内からは多数の遺物が出土しており、7世紀前葉から8世紀中葉にかけての遺物がみられる。（8～35）

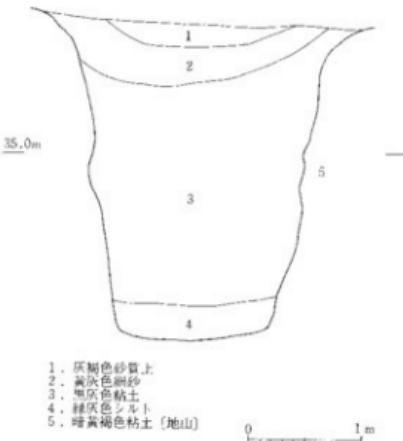
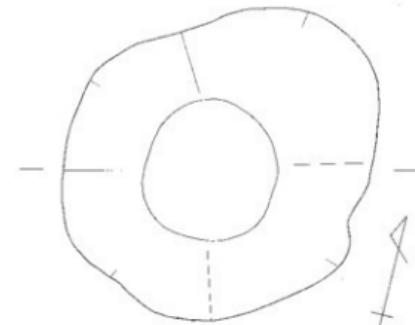


図-18 土坑-3

### 3. 遺物

1～7は土坑-3以外の造構内から出土した遺物である。1は溝-6、2は建物-7のピット-31、3は溝-5、4・5は溝-11、6はピット-41、7はピット-44からそれぞれ出土している。1は須恵器杯蓋、2～5は須恵器杯身、6は須恵器台付壺の底部、7は土師器皿である。7世紀中葉～8世紀中葉頃の遺物と考えられる。

8～35は土坑-3から出土した遺物である。8～18は須恵器、19～35は土師器である。

8～12は杯蓋。内面にかえりがみられないもの(8)、かえりを伴うもの(9)、かえりが消失したもの(10～12)がみられる。13～16は杯身。13は器高が高く、口縁部は外上方へまっすぐのびる。14は器高が浅い。15は低い高台を伴い、16も高台を伴うが口径が10cmの小形の杯である。17は鉢。口縁部は内弯し、端部で立ち上がる。18は壺。口縁部は外反し、体部は球形を呈するが、体部最大径は中位よりやや上方にある。外面は全面を格子叩きによって調整し、内面、口縁部は回転ナデ調整である。全体の約80%を残すが、口縁部はごく一部を残して数回の打撃によって打ち欠かれており、体部側面には直径30～35cmの円孔がみられる。いずれも、焼成後に意図的に打ち欠かされたと考えられ、しかも、その破片が土坑-3から出土していないことから、何らかの祭祀に伴うものと考えられる。第3層・黒灰色粘土層から、体部の円孔を上に向け、横位で出土している。

19～22は杯。19・20は内面に放射二段暗文とラセン暗文が施され、21は放射暗文とラセン暗文が施される。22の暗文の有無は不明。20の外面底部には格子状の浅い線刻がみられる。焼成後の線刻であり、ヘラ記号と考えられる。23は高杯。内面に放射二段暗文とラセン暗文を施し、外面にはヘラミガキを密に施す。24～27は小形手づくねの高杯。28～33は小形の甕である。いずれも外面を指頭調整、内面を板ナデ後の丁寧なナデによって調整する。34は羽釜。35は平底の甕である。外面はヘラケズリ後にナデ、外面底部はナデ、内面は不定方向のナデによって調整する。淡黄灰色を呈し、石英・長石等の砂粒を非常に多く含む。在地の土器ではない。

9・15・24は第2層・黄灰色細砂から、23・34は第4層・緑灰色シルトから出土。他は第3層・黒灰色粘土から出土している。各土層間での顯著な時期差は認められない。



図-19 造構内出土遺物

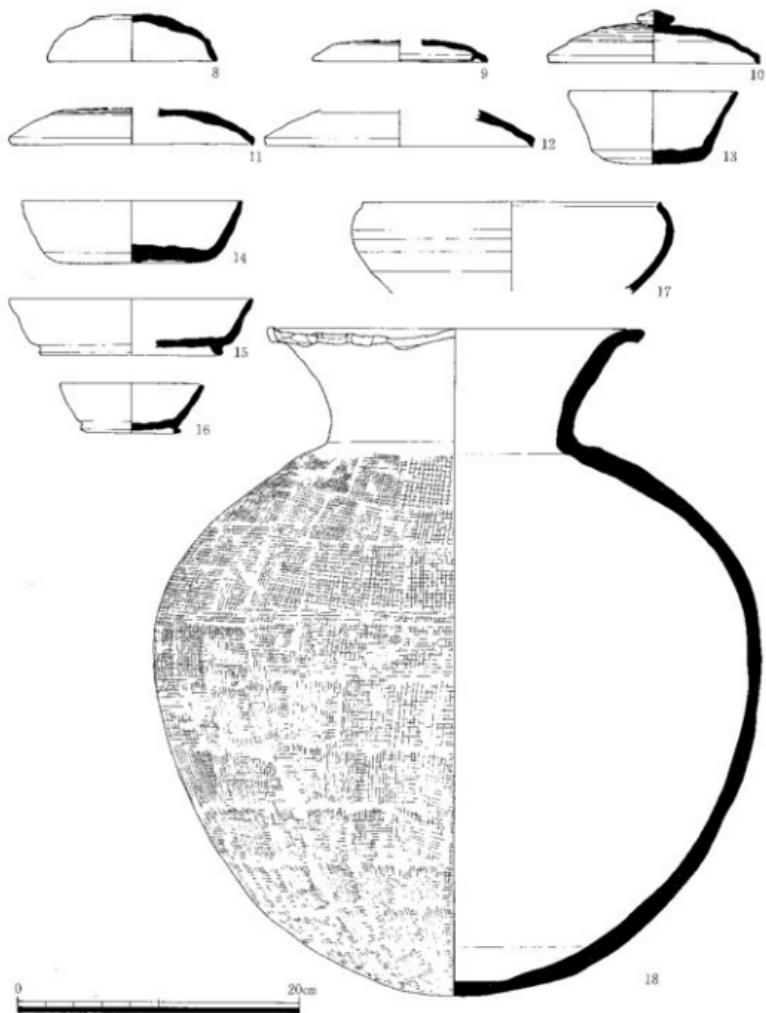


図-20 土坑-3 出土遺物

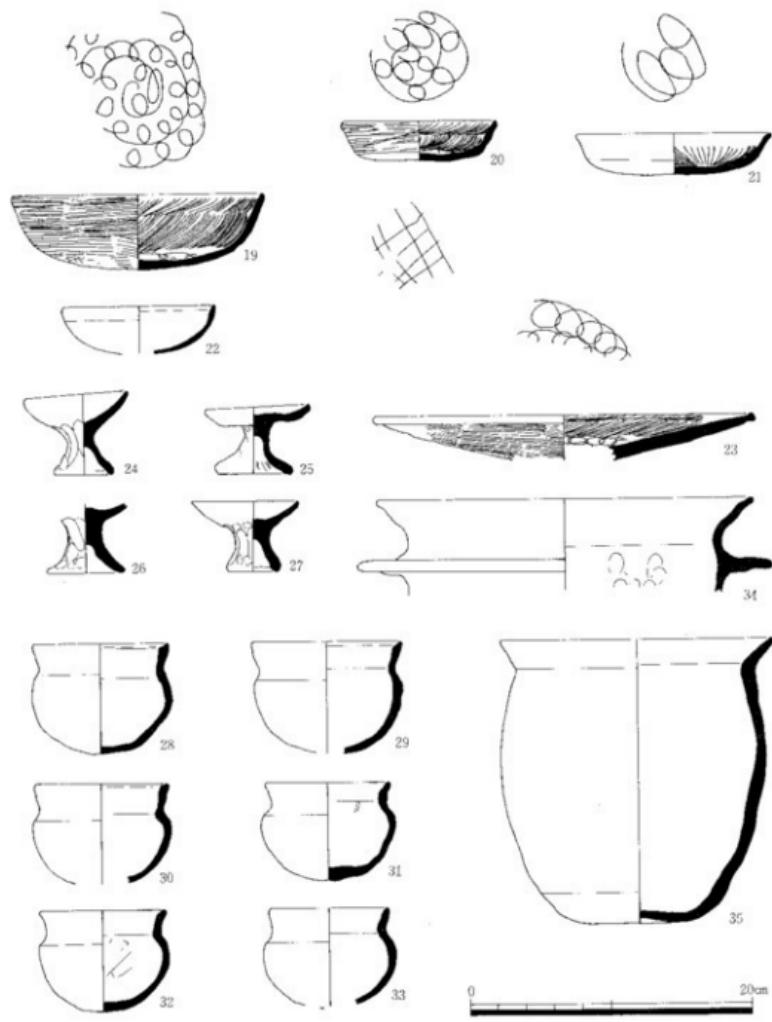


图-21 土坑-3 出土遗物

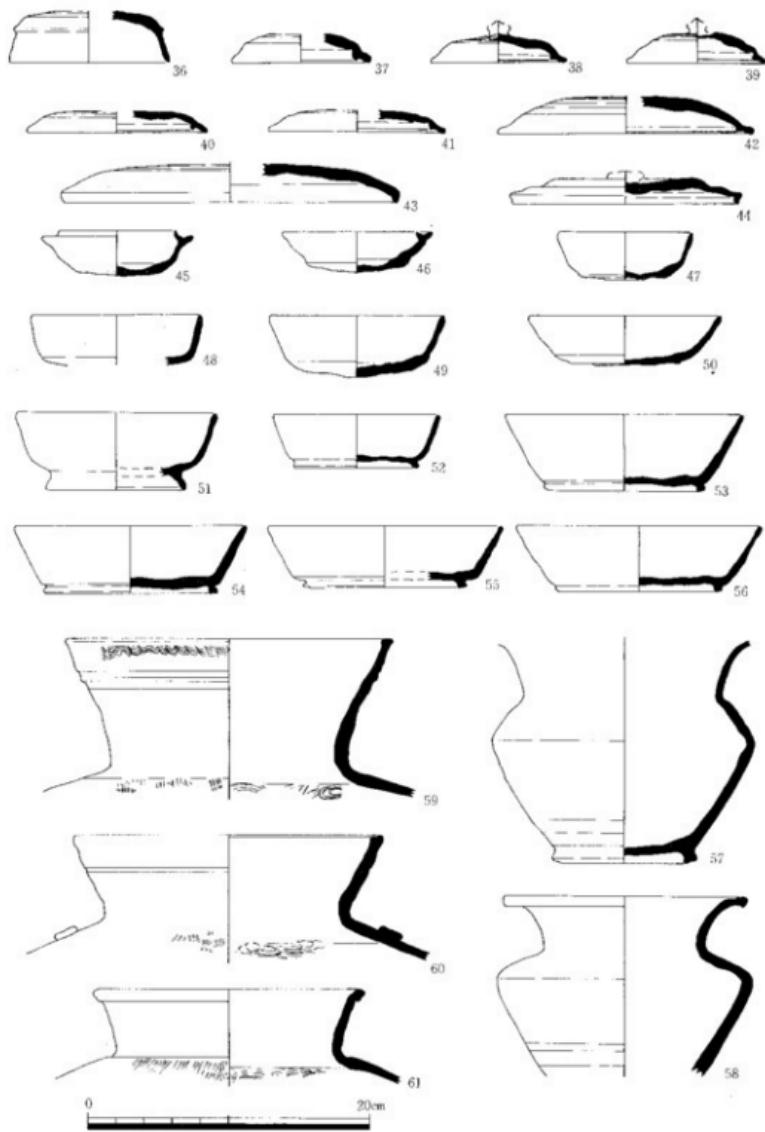
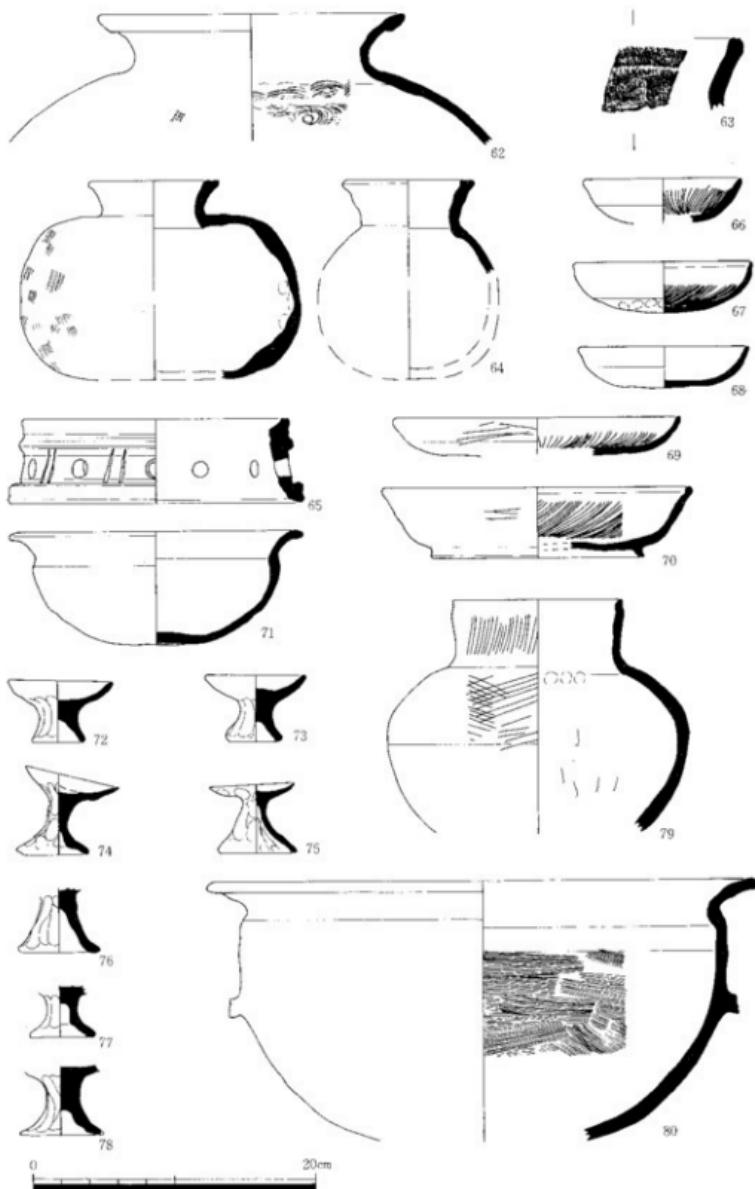


図-22 包含層出土遺物



图—23 包含层出土遗物

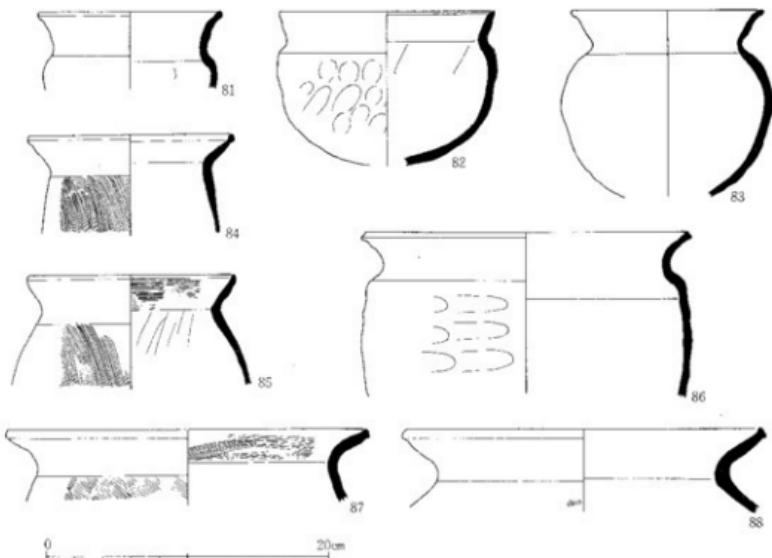


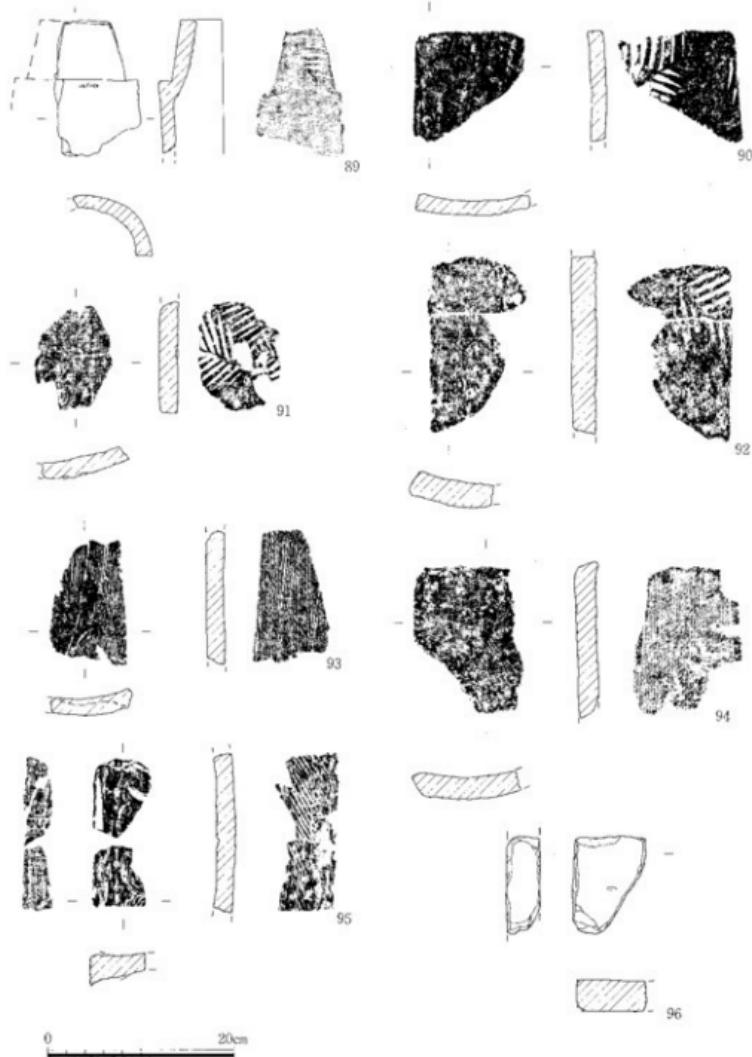
図-24 包含層出土遺物

36~88は包含層から出土した遺物である。

36~65は須恵器。杯蓋(36)は、1983年度の調査によって検出されている古墳時代の堅穴住居と同時期の遺物である。それ以外の遺物は7世紀中葉~8世紀中葉の時期の遺物である。63の壺口縁部にはヘラ記号がみられる。「上」の文字の可能性もあるが、書き順が異なっており、ヘラ記号であろう。杯身(45)の外面底部にも、3本の直線によるヘラ記号がみられる。64は横瓶。外面は平行叩き目をナデ消している。65は円面鏡。円形の透し窓は10方向と思われる。透し窓の間には縱方向のヘラ描き沈線が2本ずつ施される。

66~88は土師器。66~70は杯。それぞれ放射暗文を有する。71は口縁部が大きく外反する鉢。72~78は小形手づくねの高杯である。79は口縁部が直立する壺。外面肩部にヨコ方向のヘラミガキ、口縁部にタテ方向のヘラミガキを施す。80は把手付の鍋。外面はナデ仕上げ。81~88は甕。

37・51・56・77はI区から、その他はII区から出土。I区では中央から東寄りに包含層がみられ、II区でも中央の土坑-3より以東で包含層がみられる。遺物は大部分が7~8世紀代であり、包含層の下面で7~8世紀代の遺構が検出される。I区では中世の遺構も検出されているが、包含層からは中世の遺物は出土していない。おそらく、中世の包含層は削平されているのであろう。



图—25 屋瓦·搏

89～94は屋瓦である。89は丸瓦。外面は縄叩き目を擦り消し、内面は布目が残る。90～94は平瓦。90・91は有軸綾杉叩き、92は無軸綾杉叩き、93・94は縄叩きをそれぞれ凸面に施す。側縁の調整は、90では分割破面をヘラケズリ調整しており、91・92は分割破面未調整である。93・94は斜方向のヘラケズリを施す。93は側縁調整からは一枚作りのように思われ、凹面もヘラケズリを施しているため模骨痕の有無が不明であるが、粘土板の接合痕が断面で確認できるため、桶巻作りと考えられる。よって、90～93は桶巻作り、94は一枚作りであろう。

95は平瓦片かと思われるが、不明である。断面は緩やかに反っており、端面から両面にかけて剝離痕らしきものがみられる。剝離痕には布目がみられ、凸面では平行叩き目をナデ消し、凹面では同心円をナデ消している。叩きは須恵器の叩きと全く同一であるが、布目や形状から屋瓦の一種と思われる。剝離痕から考えると、軒平瓦の瓦当部が剥落したものかと思われる。他に類例はみられない。

96は博。厚さ3.4cm。表面は平滑にナデを施す。淡灰色を呈し、焼成良好。

屋瓦の出土量は少なく、原山庵寺の屋瓦が混入、あるいは転用されたものと考えられる。

97～103は、I区の中世遺構内から出土した遺物である。97～100は瓦器楕、101は瓦器の小形楕、102・103は瓦質の羽釜である。97はピットー43から出土、他は土坑一から出土している。97は高台を有しない瓦器楕。内面に雑なラセン暗文を施す。98～101は非常に低い貼り付け高台を有する。98・100の内面には雑なラセン暗文を施すが、99の暗文は不明である。

瓦質羽釜(102・103)の口縁部は内傾し、外面に二段の弱い段がみられる。鉢は短く、ほぼ水平に取り付く。体部は緩やかに弯曲し、器高は低い。外面は黒灰色、内面は灰白色を呈する。102の体部外面には煤が付着する。

ピットー43は14世紀前半、土坑一は13世紀後半頃と考えられる。かなり削平を受けていると考えられ、中世の遺構・遺物は非常に少ない。しかし、実際にはより多くの遺構が存在したものと思われる。

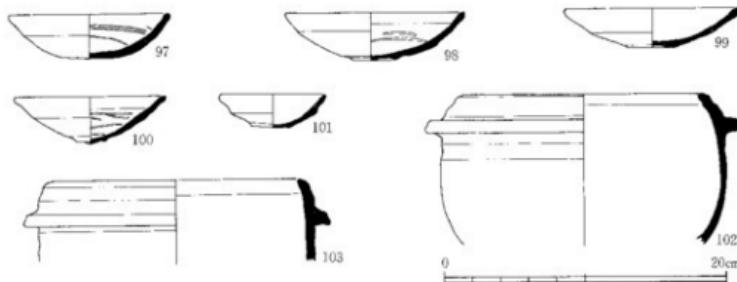


図-26 中世遺構内出土遺物

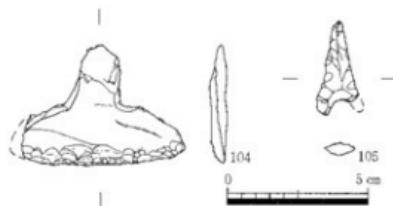


図-27 石器

104・105はサヌカイト製の石器である。104は石匙。長さ4.3cm、刃幅現存長5.7cm、厚さ0.6cm。刃部は細かい剝離によって刃がつけられており、一端を欠く。未製品とも考えられる。105は石鏽。長さ3.3cm、厚さ0.4cm。細長い凹基無茎式の石鏽であるが、刃部の加工は雑である。逆刺の一方

を欠いており、やはり未製品の可能性がある。サヌカイトの原石、剥片等は多数出土しており、石器の製作遺跡が存在した可能性がある。104・105は製作中に破損したため、廃棄されたとも考えられる。104はⅡ区包含層から出土、105はピット-42から出土している。

これら以外に、鉄滓3点、計410g、窯壁3点、計109gが出土している。

### 3.まとめ

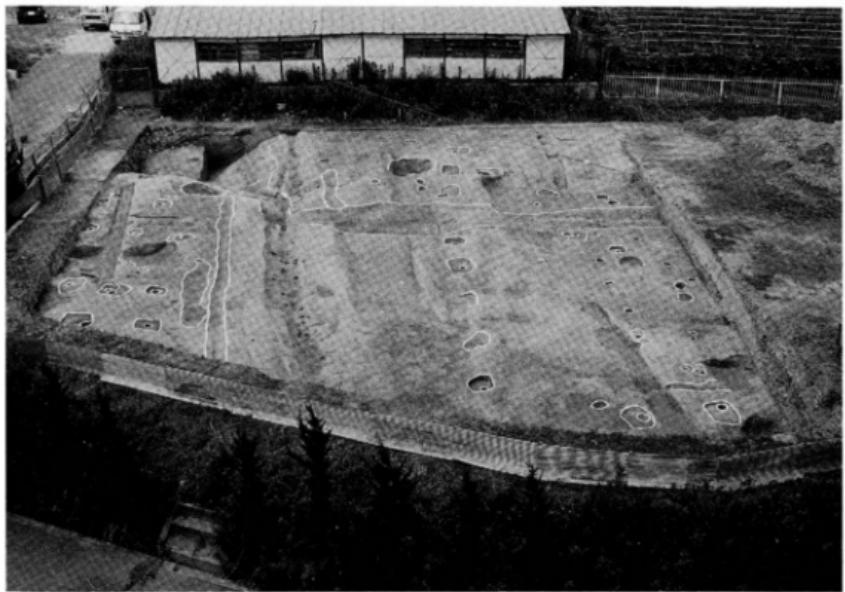
今回の調査では掘立柱建物7棟、棚2列などを検出した。いずれも7～8世紀代の造構であり、1983年度の調査を加えると、7～8世紀代の掘立柱建物は13棟になる。古墳時代の造構との関連は不明であるが、7～8世紀代の建物が原山廃寺に伴う集落であることは、ほぼ確実であろう。今回の調査地の北側には空地や葡萄畠となっている平坦地が広がっており、集落が更に北側へ続いていると予想される。そのように考えるならば、集落の規模は約100m四方となる。その北側に原山廃寺が位置すると考えられる。原山廃寺は不明な点が多いが、出土屋瓦からは7世紀中葉頃の創建と考えられ、今回の調査によって出土している遺物と時期が一致する。おそらく、7世紀中葉頃に、原山廃寺の創建とほぼ同時期に、この地に集落が成立したものと思われる。集落は8世紀中葉頃に断絶したと考えられ、9世紀代の遺物は全くみられない。

原山廃寺は既に宅地化されており、今後、地道な調査を続けなければならない。また、今回の調査地周辺に瓦窯が存在したことであるが、瓦窯に関連すると思われる遺物・造構は全く検出されておらず、この地に瓦窯を求めるることは不可能である。今後は、瓦窯の発見も含めた原山遺跡と原山廃寺の関係を明らかにしていかねばならない。また、旧地形の復元や、古墳時代の建物との関連性も重要な課題となるであろう。

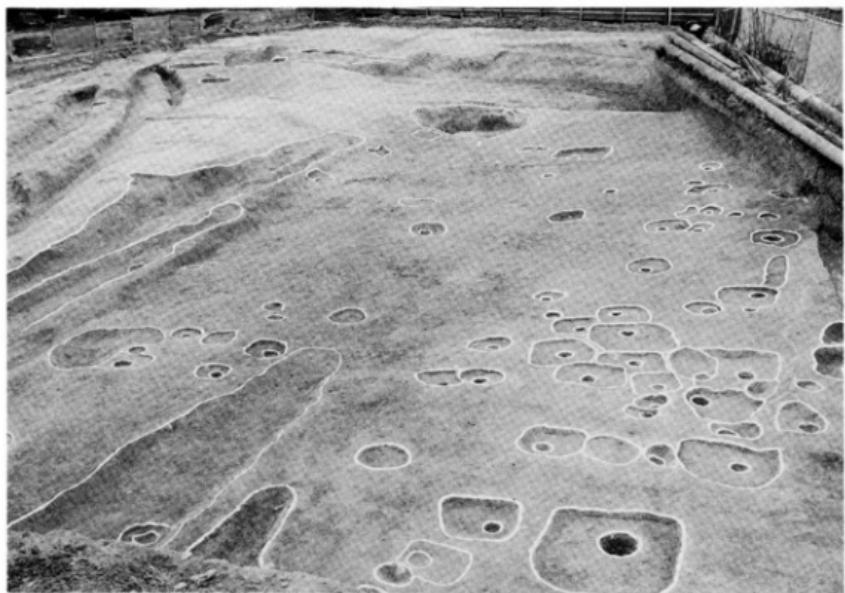
### 参考文献

柏原市教育委員会『柏原市所在遺跡発掘調査概報—原山・田辺・大塚遺跡—1984年度』1985

# 図 版



I区全景



II区全景



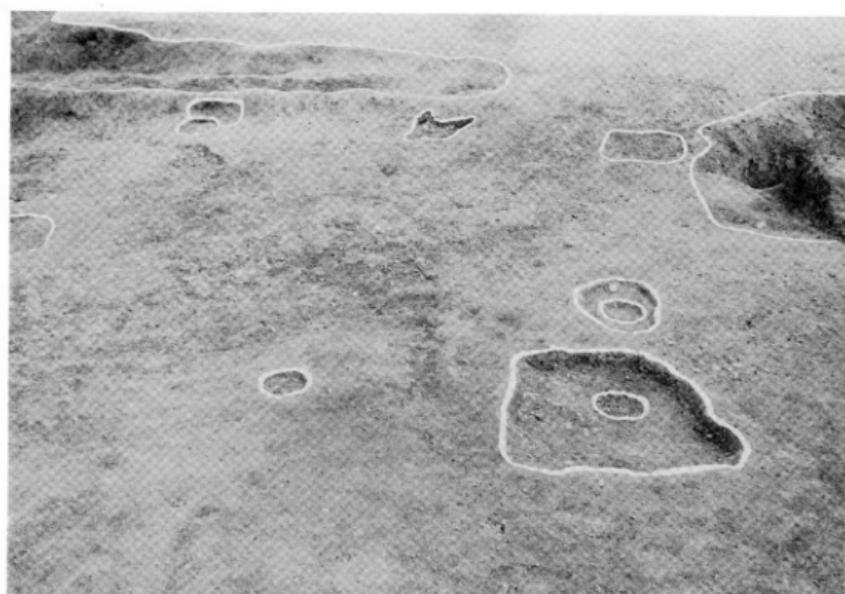
II区土層



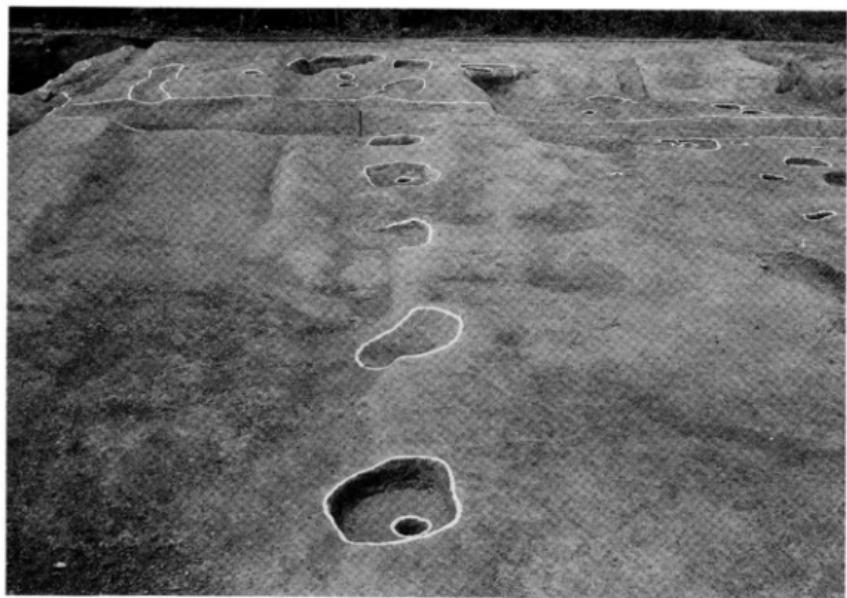
建物-1・2



建物-3～5



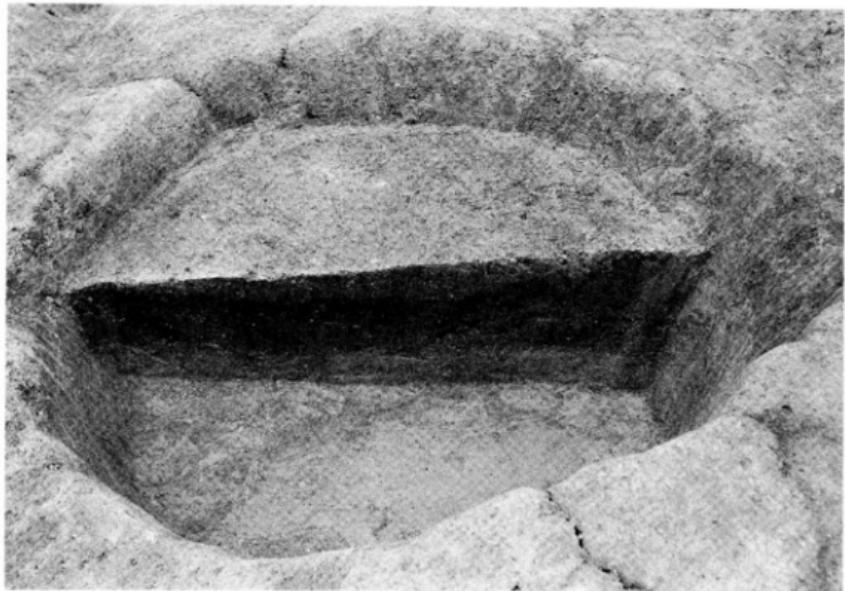
建物-6



柵-1・2



土坑-1



土坑-2

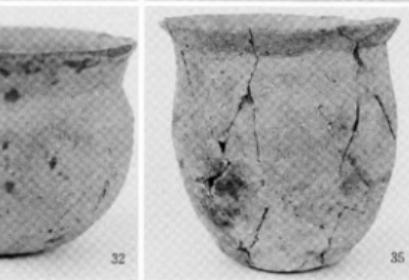
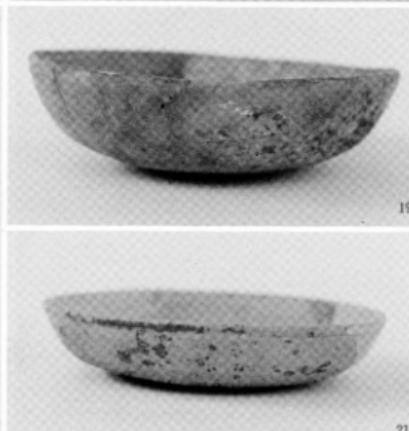


土坑-3



土坑-3 遺物出土状況

圖版 7 土坑—3 出土遺物



図版 8  
包含層・土坑—1出土遺物



## 原山遺跡

編集・発行 柏原市教育委員会  
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号  
電話 (0729) 72-1501 内5133  
発行年月日 平成元年3月31日  
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

